

生贄七人目ノ如月美緒



生贄七人目

如月美緒 (7-1.Kisaragi.mio.1)

出産予定日まであと二週間となった時期に彼女……樋口恵美子が、運動がてらの買物にと出かけたのはお昼過ぎの頃、一通り買物を済ませた後に立ち寄った閉店直前の銀行、何とか間に合ったと安心した次の瞬間に鳴り響く銃声と警報の音……我に返った時には、他の人質と共に縛り上げられ座らされていた。

そして、次々と引きずられてはカウンターの影で犯されて行く女性達の姿を見せられ、その女性達の悲鳴を聞く事となる。

震えながら彼女は祈る……早く……誰か……助けて……自分が犯されてしまう前に、他の人達が犯されている内に……誰か……早く……助けて……と、だがその祈りがかなえられる事は無かった。

「やだあ——！ 誰か！ 誰か他の人に！ 私のお腹には赤ちゃんがいるの、だからお願い、他の人にして、別の人から先に、おねがいよおお——！」

大きなお腹をした女が、泣き叫びながら男に引きずられて行く、自分ではなく他の人にしてと、別の人から先に犯してと、その泣き叫ぶ姿は見苦しかったが、その叫び様を責める事は誰も出来ない、なぜならその叫びはこの場所にいる女達、全員の本音というか本心を叫んでいたのだから……

二巡目、三人目の犠牲者に選ばれた女は妊婦だった。大きくなったお腹をかばう様にしながら、それでも男にズルズルと引きずられながら泣き叫び喚き続ける。

やめと、助けてと、堪忍してと、誰か他の人にしてと……

その女を選び出した男は、引きずる女の姿を見ながら、何か思いついた様に……他の人質達にも聞えるくらいの大声で質問する。

【ダッターラ……ジブンノカワリニ、ダレダッターライイ
ンダ？】と、男としても、女を騙る為の他愛無い愚問……と言う所であり、特に返事を期待したわけではない、ただ泣き叫び続ける女の姿が、あまりにも無様であり、



見つとも無かつたので、思わず口から出た言葉だったの
だろう。

だが襟首を掴まれ、引きずられて行く女は、その愚問
にハッキリとした声で、躊躇する事無く叫ぶ様に答えた。

「あの娘が良いわ！ 私のようなおばさんじゃない若い
娘だし、美人で綺麗よ、だからおねがいよ、私を見逃し
て、身代わりにあの娘を犯してちょうだい！」

引きずられて行く女が、必至の形相で顔を向けた先に
は、一人の少女が他の人質同様に縛り上げられた上で、
座らせられていた。

如月美緒 (7-2.Kisaragi.mio.2)

私の方を見た大きなお腹の女性が大声で叫ぶ

『あの娘が良いわ！ 私のようなおばさんじゃない若い
娘だし、美人で綺麗よ、だからおねがいよ、私を見逃し
て、身代わりにあの娘を犯してちょうだい！』

引きずっていた女性と私を交互に見た男が、その女性
を引きずりながら私の方へと近づいて来る。そしてその
女性から手を離すと、今度は私をヒョイと軽く担ぎ上げ

て言う。

【ウラムナラ、アノオンナヲウラムンダナ……】と、
こうして私は、その女性の身代わりとして、一足先に男
に犯される事となった。

担ぎ上げられたまま、今までに何人もの女性達が犯さ
れた場所へと、私は連れてこられる……そして連れて来
られる途中、着ている制服の上から、私の胸の大きさを
確かめるように男は胸を揉み続けている。

「きゃっ！」

乱暴に床へと放り出した私を、ニヤニヤと見ている男
の姿……私が、どの様な反応を見せるのかを、値踏みを
しているようだった。

そんな男に向かって私は言う。

「私を犯す前に御願いがあつたの、予備の制服をクリーニ
ングに出している最中だから、いま着ている制服を汚し
たり破かれたくないわ……自分で服を脱ぐから、手足を
縛っている縄を解いてくれないかしら？」

私は薄い笑みを、言うならば営業用の微笑むを浮かべ
ながら言う。そんな私の顔を見た男は、明らかに驚きの
表情を見せていた……



如月美緒 (7-3.Kisaragi.mio.3)

今から何年も昔の事、両親に連れられて遊びに行った雪山、そこで経験した初めてのスキー、何もかも全てが初体験の出来事、冷たい雪の感触すら心地よく、夢中になってスキーで転びながらも滑りまくった一日、自分を心配する両親の言葉すら耳に届かなくなった事にも気がつかず、汗をかくほどにスキーを楽しんだ末、ようやく我に帰った時に、自分だけが白い雪の真っ只中にいる事に気がつく、慌てて周囲を見回し、両親の姿を探しても両親は愚か他の人の姿すら見つける事が出来なくなった。日は既に傾き始め周囲は暗くなって行き、雪すら降り始める……最初はチラチラと言う感じで降っていた雪は徐々に強くなって行き、白く暗く私の周囲を閉ざし始める。

両親の所へと、人が居る所へと、必死に戻ろうと雪の中を歩き回る私……だけど、自分が何処を歩いているのかすら解からなくなり、ただ雪が降り続き暗くなった雪の中を、半分泣きながら必死に歩き回る。

そしてどれくらい歩き回っただろう……もう疲れ果てて、歩けないと思った時、遠くの方に微かな灯りが見えた。

その微かな灯りを希望にして、私は最後の力を振り絞って、必死に雪の中を漕いで、その灯りの方へと歩いて行く……あの灯りの所まで行けば、助かるんだと思えば必死になって！

だけど……いま思う……あの時に、あの灯りを見つかなかった方が幸せだったのではないだろうか？

たとえ、あのまま道に迷った末に死んでしまったとしても、いまよりは遥かに幸せだったのではないかと？

だけど、わたしはあの時に灯りを見つけてしまい、その光の方へと進んで行く事しか出来なかった……それが今に続く地獄へと向う灯りになると知らず、希望の灯りだと思いがながら……必死になって……

その灯りに誘われ、ようやくに辿り着いたのは、小さな山小屋だった。人が住むような立派な物ではなく、物置に毛が生えた様な小さな……今考えれば山で仕事をする人が、山で使う資材とかを一時的に置いておく為の物置の様な小屋であった。

それでも灯りがともっているのだから、誰かがこの中

に居るに違いないと思い、私は閉じられている山小屋のドアを必死に叩きながら、声を振り絞って叫ぶ

「開けてください、道に迷ったんです。誰か居ませんか、ここを開けてください！」

私は閉じられている山小屋のドアを必死に叩き続ける……そして開かれる山小屋のドア、そのドアの内側に立っていたのは、まだ若い男の人だった。

助かった……と言う安堵感で、私はその場にへたり込んでしまう。そんな私を抱かかえるようにして男の人は、小屋の隅に作られた空間に私を座らせた。

その男の人も、私と同じ様に雪によつて道に迷い、この山小屋に避難したと、ポケットからチョコを取り出し、それを座つたままの私に手渡ししながら言う。

「あつ、ありがとうございます」

手渡されたチョコを食べる私、そんな私の身体に付いている雪を払い落としてくれる男の人……その雪を払い落とす手の動きが、妙に身体のいろんな場所に触れるように感じたのは、私の気のせいであつたのだろうか？

小屋の中にあつたと言う小さなランプ、その灯っている火だけが、小屋の中にある唯一の火の気……小屋の外は、相変わらずに雪が降り続け、それに合わせる様に気温もどんどん下がって行くのが、身体に染み込んでく

るような寒気で解かる。それでも雪の中を歩き回り、汗をかいた身体は冷え始め、私はカタカタと震え始める。

「うくつ……さむいよお……」

そんな私の姿を見ていた男の人は言う。こんな火の気がほとんど無い冬の山小屋、身体を暖める為に互いの身体を寄せ合つて抱き合おうと……

最初にそう言われた時、私は躊躇いを覚えたが、実際に火の気のほとんど無い山小屋の中は本当に寒く、時間が経つにつれてその寒さは耐え切れないほどになってくる。そして私は、服を着たままの状態でも男の人と抱き合つて暖を取る事となった。

「それじゃ……すいませんが、おねがいします」

男の人が来ていた防寒服、その中に包まれるようにして、私と男の人は抱き合う事となる。それは確かに暖か……ただけで見知らぬ男性とピツタリと身体を寄り添わせる緊張感に、私は胸を下キドキさせ、顔を真っ赤にしてしまう。

そんな抱き合つたままの状態でも、男の人は私に色々と言ってくる。

……お嬢ちゃんのお名前は？ いくつなのかな？ お父さんは？ お母さんは？ どこに住んでいるのかな？

……本当に様々な事を私に聞いて来る。

そしてその問い掛けに私は素直に答えた……自分の名前、いま何歳なのか、お父さんとお母さんの事、どこに住んでいるか……いま考えると、何でこんな事まで答えてしまったのかと、思ってしまう事まで素直に答えていた。

そして男は続けて聞いて来る……好きな男の子はいるの？ と……

「えっ？ あっ……好きな男の子なんて……いません……」

……それじゃあ、オナニーで知っている？

「そ、そんな事……わたし知りません……」

……赤ちゃんが、どうしたら出来るかとか知っている？ ……

「それは……知りません、どうしてそんな事を聞くんですか、やめてください！」

男は笑いながら、それじゃ最後の質問だよと言って、私に聞いてくる……

(いったい何を聞いて来る気なんだろう……)

漠然とした不安……それは恐怖にも似ていた。寒さ以外の何かゾクリとするような悪寒……それが私の身体の中を走った。

思わず男の顔を見る。何を考えているのか、よく解らない薄笑いを浮かべている男の顔が、私を見ている。そして男は私に最後の質問をした……

……美緒ちゃんは、セックスで知っている？ 今までに誰かとセックスをした事はあるの？ と……

そんな事に答えられる筈が無い、私は本当は知っていた……オナニーという単語の意味も、赤ちゃんがどうしたら出来るかも、そしてセックスと言う言葉の意味が何を指しているのかも、その行為の結果として私が存在していると言う事を……でも、そんな事を言える筈が無い……わたしは無言のまま、横を向いて男の顔から視線をずらし、顔を真つ赤にしながら男の言葉を無視する。

暫くの間、男は私の答えを待っていた様だが、やがて諦めたのか何も聞いてこなくなる……だけど少しして、男は再び言葉を口に出した……

……それじゃ……ぼくがおしえてあげよう……せつくすというものが、どんなにたのしいかということ……「えっ？」

最初は、男が何を言ったのか、その意味を理解する事が出来なかった。

「何を、んっ……くうっ！？ あっひい！ あふっ、んっんんっ……ああふう、はあふううう、んっんああ……

…あぶう、むううう……ぐうふううう……んっんああー
—!—

男が何を言い、何をしようとしているのか、それを知り理解したのは、男が私の唇に無理やりキスをした時だった。

「ひやあぶう……はあぐううああぐうう……はあんっあ
っああ……んぶう!—」

男の唇で塞がれた私の唇、その唇が抉じ開けられ、男の舌が私の口の中に差し込まれ、私の舌を絡め取りながら廻り続ける。

「はあぶうう、はあぐううう……んっがああひいぐひゅ
う……はあひいぎい!—」

男の舌が、私の舌を口中で捏ね回し続ける……男の口から流し込まれる唾液と、私の口から湧き出してくる唾液、それが混ざり合いながら私の口の中に溜まる……

「はあぶう……はあひいぐうう……ひいぐう、げえほお
んなっ……あぶう……あっ、あんんぐううぐうんあ
っ!—」

ようやくと離された唇、溜まった唾液は、吐き出そうとした瞬間に、私の口は閉じ合わされ、頭をクイツと持ち上げられる。そして口の中に溜まっていた唾液は、喉の奥へと流れ込んで行き……私は、その男と私の混ざり

合った唾液を飲み干してしまふ。

「えひい……えほお、げえふうう……つうくあはあひい
……はあふ……はあふうう……なにを、何をする気なん
です……」

まだ誰もした事なかった私のファーストキッス……
それを突然に奪われてしまった……暴力的に……酷い……
……しかし、これはほんの始まりでしかなかった。

如月 美緒 (7-4.Kisaragi.mio.4)

私の唇を奪った男の手が、もぞもぞと動いている事に気が付く、もぞもぞと動く手は、服の上から私の胸やお腹に触れる。そればかりか、服の中へと入り込んでこようとし始めていた。

「なにを、なにを……やめてください……」

驚きながらも、私は必死に声を出し男に言う……だけど男は、そんな私の顔を覗き込む様にしながら、もぞもぞと手を動かし続け、驚くような事を言った。

……教えてあげるって言ったよね……美緒ちゃんにせつくすが、どんなものなのかを、たのしいものだという

ことを……と……

男が何を言っているのか、最初は良く理解する事が出来なかつた。だけど、もともと動いていた手が、私の服の中へと入ってきた時、この男の人が何をしようとしているのか……キス以上の何をしようとしているのかを私は理解した。

「やだあつ！」

擦り寄ってくる男の身体を押しつけ、男の腕の中から逃げ出そうとしたが、私の身体を抱きしめる男の力は、強まりこそすれ弱まる事は無い

「いやあ、やめて、お願いしますから、やめてください！」
抗いの声を出し、男の腕から逃れようと必死に足掻くが、セーターの中へと入ってきた男の手は、そのままセーターを捲り上げる。

「やめてください、そんな事知りたくないです。だからいやあ、おねがいですから服を脱がさないで、脱がしちゃうだめえ、おねがいだから脱がさないでえ、そんなふう私にさわらないで、おねがいします。おねがいですから、おねがいだからあ！ 本当に知りたくないから、もう知っているから、教えてなんかありません、だから……だから、やめてええ——！ んっ」

悲鳴を上げながら、必死に着ている服を脱がされまいと抵抗しつづけた私だったが、その抵抗はなんの役に立つ事もなく、逆に男の行動を更に加速させるだけの結果を招く……

「だめえ、おねがいます。服を、服を脱がさないでえ、私にさわらないでえ……あぐう、あつ、ああああ……いやああ——！」

セーター、その下に着ているブラウス、そして防寒用のスラックスと赤い色の毛糸のパンツや靴下、それらの物を引き剥がす様に脱がし、キャミソールと下着だけと言う姿にされた時、男は抱きしめていた私の身体を解放し、小屋の中に放り出す。

「あうっ！」

そして今度は、自分が着ている服を脱ぎ始める……全然としている私の目の前で次々に……

「なにをするきなんですか、やめて……やめてください！」
私の叫びが聞えていないとでも言うように、男は黙々と服を脱いで行く、そんな男の姿を恐怖と驚きによって、目を離す事も目を閉じる事もできなくなつた私は、ガクと全身を震わせながら見続ける……そして男は、最後に身に着けていたトランクスを脱ぎ捨て、私の目の前にいきり立ち臨戦態勢となつているペニスを曝け出した。

